

第36回日本臨床微生物学会総会・学術集会

ランチョンセミナー13

迅速な薬剤感受性検査の重要性

2025

1/26

SUN

座長

小松 方 先生

天理大学 医療学部 臨床検査学科

🕒 11:55 - 12:45

場所

第5会場
名古屋国際会議場
4号館1F 白鳥ホール(南)

演者

中村 竜也 先生

京都橘大学 健康科学部 臨床検査学科

ランチョンセミナーは事前申込制となります。
学会HPの「ランチョンセミナー」ページよりお申込みください。

共催：第36回日本臨床微生物学会総会・学術集会／株式会社フコク





～迅速な薬剤感受性検査の重要性～

抗菌薬適正使用の最終目標は、有効かつ狭域な抗菌薬の迅速な投与にあると考える。近年、検査・診断技術の進歩により、検査の迅速化が加速度的に変貌を遂げており、早期の抗菌薬適正使用に貢献している。MALDI-TOF MSによる菌種同定や全自動遺伝子検査システムによるMRSA や ESBL などの耐性菌検出が近年の代表的な迅速検査であり、多くの施設で導入されている。この結果は、部分的ではあるが薬剤感受性の結果を提供することが可能となり、抗菌薬選択に関する情報の迅速化を実現した。しかし、これらは無効な抗菌薬の情報を得ることは可能であるが、有効な抗菌薬の提示には至らない。ゆえに、薬剤感受性検査の迅速化は更なる抗菌薬適正使用を可能とするために必要不可欠であると考ええる。

薬剤感受性試験の迅速化は世界的にはデジタル顕微鏡やレーザー光散乱法など様々な技術が登場している。これらの技術により6 時間で薬剤感受性試験の結果報告が可能な機器が欧米を中心に保険適応され、救急や小児領域などで威力を発揮している。

日本における薬剤感受性検査の迅速化は、蛍光色素法やRate Assay 法などを用い、約 6 時間から特定の抗菌薬について結果報告されるが、最終報告には時間を要する。一方で、既存の測定原理とは異なる迅速薬剤感受性試験も日本で開発されている。その一つにマイクロ流路チップを用いた方法が松本らにより開発されている。通常 18～24 時間を要する緑膿菌の薬剤感受性検査を 3 時間以内に測定することが可能としている。本法は特別な機器を必要とせず、マイクロ流路チップと顕微鏡があれば検査することが出来、多くの施設で導入可能な技術と考える。

薬剤耐性菌が増加する中、薬剤感受性検査の迅速化は喫緊の課題であり、測定精度を担保しつつ、更なる迅速化を実現することが近未来には必要である。そこで、薬剤感受性検査の迅速化がもたらす効果について抗菌薬適正使用の観点から考える機会としたい。

京都橘大学 健康科学部 臨床検査学科

中村 竜也 先生